魔王陛下、お仕事ですよ

鈍色満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王陛下、お仕事ですよ

【Ｎコード】
Ｎ０９７４Ｙ

【作者名】
鈍色満月

【あらすじ】
「――ふー。勇者の奴、漸く帰ったか」
異世界から召還された勇者は、長い長い旅の末に魔王を討ち滅ぼす。魔王討伐に成功した勇者一行が魔王城より立ち去った後、主を失い、廃墟と化した魔王城の一角にて蠢く影が。
それこそ幼子の姿こそしているが、先程勇者に寄って止めを刺され、滅ぼされた筈の魔王であった。

「全く。魔王様が本気になればあの様な餓鬼なんぞ、一発で昇天だというのに……」

「ぶつぶつうるさいぞ、そこ。口動かすなら仕事しろ」

愛すべき魔族共に囲まれて、今日も書類仕事に勤しむ魔王陛下。魔族の父であり母である魔王の平穏なる（？）日常の数々をどうぞ、お楽しみください。

終わりから始まる物語（前書き）

勇者一行のメンバー

・勇者（異世界人）
・弓使い（頼れる兄貴分）
・僧侶（温和な平和主義者）
・女魔法使い（典型的ツンデレ）
・盗賊（生意気な子供）

終わりから始まる物語

――――暗雲渦巻く、奇形の鳥達が飛び交う暗黒の城・魔王城。
その城の奥の奥、深部の深部。
魔王とのラストバトルに相応しい、巨大な大広間では死闘が繰り広げられていた。

「――――覚悟しろ、魔王！！」

やって来たのは、異世界から世界を救うために召還された勇者とその仲間達。
白銀に輝く聖なる剣を握りしめ、前を、魔王を見据える視線に迷いは無い。

既に戦いは長時間に及んでいる。
幾ら百戦錬磨で知られる勇者とその仲間達をもってしても、魔族の王にして闇の眷属の頂点であるという魔王を相手に無傷で済む筈が無い。
戦いが長引くにつれ、勇者にも、その仲間達にも、傷が増えていく。

『グオオオオーーーー！！』

しかし、それは彼らと対峙する魔王とて同じ事。
両者が相見えた際の、何処か人間離れした魔性の美しさなどとうに消え失せ、魔王は今や人の形を留めぬ異形の姿をしている。

「くっ！　しぶといな！！」

「腐っても相手は魔王ですからね」

弓使いが滴る血を鬱陶し気に拭いながら吐き捨てると、温和な顔立ちの僧侶が頬に汗を滲ませながら同意する。

勇者一行の焦りを感知したのか、異形の姿となった魔王がますます攻撃の手を強くする。

それを女魔法使いの結界でなんとか凌ぐが、相次ぐ攻撃の数々に徐々に結界に皹が入っていく。

「勇者！　この結界が破れた時が勝負です！　一瞬だけ魔王の動きを止めますから、貴方はその隙に！」

「分かった！」

僧侶の悲鳴の様な叫びに、勇者が頷いて聖剣を握りしめる。

甲高い破砕音と共に女魔法使いの結界が破られ、同時に僧侶の詠唱が完成した。

「今だよ、勇者！　やっちゃって！！」

未だ幼い盗賊が勇者を振り返る。

僧侶の呪文によって創られた黒鉄の鎖が魔王の動きを拘束する。

動きを封じられ、魔王が悔し気に咆哮を上げた。

――――そうして。

「わあああぁぁぁ！！」

勇者が叫びながら、魔王へと特攻する。

彼の持つ聖なる呪文を刻まれた聖剣が閃光を放つと、そのまま魔王の体へと突き刺さった。

『ぐ、ぎゃあああああぁぁ！！』

弱点である心臓を聖なる剣に貫かれ、魔王が断末魔の悲鳴を上げながら一気に灰と化す。

大きく息を吐く勇者の目の前で、彼の旅の目的であった、世界を破滅へと導くと伝えられる魔王は消え失せた。

「お、終わった……」

精魂尽き果てた勇者の膝が崩れ、彼の仲間達が慌てふためきながら勇者へと駆け寄っていく。

やがて、魔王という脅威を見事退治し、世界へと平和を齎した彼らを祝福する様に、魔王城へと一条の光が差し込んだのであった。

終わりから始まる物語（後書き）

次の話より本編開始です。

勇者の去った魔王城（前書き）

終わりから始まる物語、その通りです。

勇者の去った魔王城

先程までの激しい死闘の跡が残る、魔王城深部。
普段であれば魔族の王が配下の者達と謁見に使うそこは、所々崩れ落ちた壁面の隙間からは日差しが差し込み、砕けた石造りの柱の欠片が乱雑に転がる、何とも哀れな空間になっていた。
壇上の真紅の垂れ幕が半分引き千切られた上に埃を纏った情けない姿を晒している中で、壇上中央の黒と金で飾られた玉座だけがその姿を傷付ける事無く、完全な形を残していた。

魔王は消え失せ、勇者が去った後の空間に幼い声が響き渡った。

「――――ふーー。勇者の奴、やっと帰りおったか」

まさに魔族の王に相応しい、他者を威圧する玉座の後ろから出て来たのは、小さな人影。
歳の頃はおそらく十歳程度の幼子。
体の至る箇所に埃を付けたまま、子供は大きな溜め息を吐きながら、半壊した謁見の間を見渡した。

「やれやれ。修繕とてただではないのだぞ、勇者の奴め」

ぱんぱん、と服を叩いて埃を落しながら、幼子が呟く。
その稚い容姿と相反した老成した眼差しで視線を巡らせる子供の姿を、去って行った勇者達が目撃したならば、おそらく悲鳴を上げたに違いない。

肩まである烏の濡れ羽色の黒髪に、金色がかった琥珀の双眸。
雪の様に真っ白な肌と鮮やかな朱唇。

指の爪先から髪の一筋に至るまで完璧な美の極致とも言えるその姿。
美しいけれど、男とも女とも判別出来ぬ、中性的な顔立ちの幼い子供。

その子供が、先程勇者一向によって退治された筈の魔王と同じ顔をしていたのだから。
より正確にいえば、勇者一向のせいで異形の姿となる前の魔王とではあるが。

魔王と瓜二つの美しい容姿の子供は、再度溜め息を吐くと、踵を高く打ち鳴らした。
すると、押し進められた時計の針を巻き戻す様に、室内に散らばる瓦礫の山がゆっくりと動き出す。

崩れ落ちた壁面の欠片は砕かれた箇所を塞がれ、砕けた柱は真っ直ぐに。
所々陥没した床面は元の滑らかな姿を取り戻し、引き千切られた垂れ幕は修繕される。

「……まあ、ざっとこんなものか」

立ち所に謁見の間を元の壮麗な空間へと戻した子供は、満足げに辺りを見回す。
そんな子供に、怜悧な声がかけられた。

「――――お戯れが過ぎます、我らが魔王陛下」

魔王、と呼ばれた子供がゆっくりと振り返る。
琥珀の視線の先にいるのは、先程勇者一行と共に去った筈の僧侶

であった。

その訳その意味その理由

「やあ、僧侶。中々怖い顔だな。勇者が見たら卒倒するぞ」
「……何故このような真似をなされたのか、理由をお窺いしても？」
とうに魔王城より勇者と共に去った筈の、しかも敵である筈の僧侶に向けて、魔王と呼ばれた子供はニヤリと笑みを浮かべる。
茶化す様なその仕草に、僧侶の眉間の皺が深くなった。

「貴方様が気まぐれで動く方だと言うのは我らとて承知の上ですが、その様なお姿になられてまで、何故このような洒落にならぬ戯れをなされたのですか？」
「怒るな、怒るな。折角の綺麗な顔が恐ろしい事になっているぞ」

くすんだ色の飾り気も何も無い僧服を纏っている僧侶は、よくよく見れば整った顔をしていた。
地味な格好と短く切り揃えられた髪に縁なしの眼鏡のせいで、その容姿はどこか乾いた物として他者の目には映っていただけ。

魔王と呼ばれた子供の言葉を聞き、僧侶が鬱陶し気に付けていた眼鏡を外して薄茶色の髪を掻き揚げる。
すると次の瞬間には、先程までそこに居た地味な僧侶は消え失せ、他者の目を集めずにはいられない、怜悧な美貌の青年へと姿を変えていた。

薄茶色の髪から、銀糸の混ざった灰髪へ。
温和な輝きを宿していた茶色の双眸は冷たい光を宿した藍色に。
その身に纏う質素な僧服でさえ、まるで貴族の礼服を着ている様

な錯覚に陥らせる。

「わざわざこの私を人間に扮させ、勇者一向に加入させたのです。当然、それなりに意味を持つ行為であったのでしょうねぇ？」

その慇懃無礼な態度に子供は腹を立てる事無く、滑る様な動きで壇上より降り立って、僧侶であった青年の前へと歩を進める。

「その点に関してはよくやってくれた。勇者一行が無事に此処まで辿り着けたのもお前のおかげだ。感謝するぞ、藍玉（らんぎょく）」

「お褒め戴き恐悦至極、我らが魔王陛下。――ですが、誤摩化されません」

ギン！　と殺気立った眼差しで青年が魔王と呼ばれた子供を睨みつける。

「何故、危険を犯してまで、あの様な餓鬼に討たれる真似などなされたのです？」

「だって、仕方ないじゃないか。――――あの勇者、泣いてたんだから」

居心地悪そうに、明後日の方向へと視線をそらした魔王が、口を尖らせた。

その訳その意味その理由（後書き）

魔族の名前は漢字二文字で色がつきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0974y/

魔王陛下、お仕事ですよ

2011年10月31日22時14分発行